



それは 残念

slowharu5265

第一章

ねえ、その人。そう、あなただよ。ちょっと話を聞いてもらえない？

何？ 今から電車に乗るんだって？ いいじゃない、来るまで私と話そうよ。電車が来ることなんて忘れさせてくれるくらいのお話を聞かせてあげる。

何で私なのかって？ そりゃ思うよね。それはねえ、あなたが小さいころの私によく似ているからだよ。さっき横にいる老人を見て顔をしかめていたでしょう？ あれが本当によく似ていてね。え？ まだ十分若いじゃないかって？ それはありがとう。

どこから話そうかな。まあとりあえず、そう私は老人が大嫌いだったんだ。

いや、そんな言葉であらわせないくらいの恐怖感を私は持っていたんだ。

どうしてだか分かる？ 臭いだよ。

あの老人独特の臭い。私はあれが怖かったんだ。

あの体の中のどこかが確実に腐敗していくような臭い。死が音を立てて忍び込んでくる臭い。あれが回りに巻き散らかるたびに私は鳥肌が立ったよ。

そう、私は死というものがたいそう恐ろしかったんだ。

無常観というのを学校で教わった？ 今やっている？ それはちょうどいい。

あれを聞いて貴方は恐ろしくならなかった？

世の中のすべてのものが永久不変ではない、つまりどんなものでもなくなってしまうという考え。それを知った時には軽い絶望が襲ってきたね。この本も、この服も、そしてこの私もいつかはなくなってしまうんだ。

分かっていたけれど、それでもきつかった。その時の古典のテストの点数はひどいものだったよ。なんでかって？ 聞いたら笑うよ？ 怖くて教科書が開けなかったんだ。ほら、笑ったあ。冗談じゃあないよ。あれは学校で教えるべきものではないね。ついでに太宰治なんかも読ませるべきではないよ。日本の自殺率が多いのもそのせいじゃあないかと思ってしまうくらいだ。

太宰って誰だって？ そうか、今の時代は教科書にも乗らなくなったか。

話が脱線したね。ちょっと髪を直させてもらっていいかい？ 髪がきれい？

よく言ってくれた！ 私はこの黒い髪が小さいころからたいそうお気に入りだねえ。それもあろう。この自慢の黒い髪がなくなってしまうと思うだけでぞっとしたね。

だから私は死について極力何も考えないようにしていたんだ。本もテレビも大好きだったんだけど、死に関するものは一切見ないようにしてきた。恐ろしかったんだよ。

なのに、その努力を一瞬にして台無しにしてしまうものがあった。

老人だよ。

電車に乗る時、道ですれ違った時、嫌でもあの忌まわしい匂いをかいでしまう。どんなに息を止めても洪水のように私のびくうになだれ込んでくるあの臭い！

そのたびに、私がしている目隠しは無理やりに外されてしまうんだ。見ない振りをしていたって同じだと。どうせお前もいつかはあの臭いを発しながら消えていくのだと。

恐怖だよ。私が必死で築き上げてきた何かが、あの臭いだけによっていとも簡単に壊されてしまうんだもの。

私からもいつかあんな臭いが発せられる日がやってきてしまうのだろうか。いやだ、嫌だ、ならばそんな臭いを発するその前に、この黒髪に白いものが混じるその前に、終わりにしてしまおうかとも思った。

だから、TVで寝たきりの老人が「まだまだ生きたい」と力なくマイクに向かってささやいているのを見たときは驚愕したし、吐き気もしたよ。こんな無様な姿をさらして、こんなたくさんの人に迷惑をかけて、何よりあの忌まわしい臭いを強く発しているのにもかかわらずそんな言葉を口にできるとは、こいつは年のせいで気でも狂ったんだ。そうおもったよ。

けどどね、自分で終わらせる勇気も私にはとてもなかったんだ。死ぬ勇気案ってとてもないし、でもこのまま死に向かっていくのも怖い。矛盾しているんだよ。全く、笑ってしまうねえ。

ねえ、その人。そう、あなただよ。ちょっと話を聞いてもらえない？

何？ 今から電車に乗るんだって？ いいじゃない、来るまで私と話そうよ。電車が来ることなんて忘れさせてくれるくらいのお話を聞かせてあげる。

何で私なのかって？ そりゃ思うよね。それはねえ、あなたが小さいころの私によく似ているからだよ。さっき横にいる老人を見て顔をしかめていたでしょう？ あれが本当によく似ていてね。え？ まだ十分若いじゃないかって？ それはありがとう。

どこから話そうかな。まあとりあえず、そう私は老人が大嫌いだったんだ。

いや、そんな言葉であらわせないくらいの恐怖感を私は持っていたんだ。

どうしてだか分かる？ 臭いだよ。

あの老人独特の臭い。私はあれが怖かったんだ。

あの体の中のどこかが確実に腐敗していくような臭い。死が音を立てて忍び込んでくる臭い。あれが回りに巻き散らかるたびに私は鳥肌が立ったよ。

そう、私は死というものがたいそう恐ろしかったんだ。

無常観というのを学校で教わった？ 今やっている？ それはちょうどいい。

あれを聞いて貴方は恐ろしくならなかった？

世の中のすべてのものが永久不変ではない、つまりどんなものでもなくなってしまうという考え。それを知った時には軽い絶望が襲ってきたね。この本も、この服も、そしてこの私もいつかはなくなってしまうんだ。

分かっていたけれど、それでもきつかった。その時の古典のテストの点数はひどいものだったよ。なんでかって？ 聞いたら笑うよ？ 怖くて教科書が開けなかったんだ。ほら、笑ったあ。冗談じゃあないよ。あれは学校で教えるべきものではないね。ついでに太宰治なんかも読ませるべきではないよ。日本の自殺率が多いのもそのせいじゃあないかと思ってしまうくらいだ。

太宰って誰だって？ そうか、今の時代は教科書にも乗らなくなったか。

話が脱線したね。ちょっと髪を直させてもらっていいかい？ 髪がきれい？

よく言ってくれた！ 私はこの黒い髪が小さいころからたいそうお気に入りだねえ。それもあるだろう。この自慢の黒い髪がなくなってしまうと思うだけでぞっとしたね。

だから私は死について極力何も考えないようにしていたんだ。本もテレビも大好きだったんだけれど、死に関するものは一切見ないようにしてきた。恐ろしかったんだよ。

なのに、その努力を一瞬にして台無しにしてしまうものがあった。

老人だよ。

電車に乗る時、道ですれ違った時、嫌でもあの忌まわしい匂いをかいでしまう。どんなに息を止めても洪水のように私のびくうになだれ込んでくるあの臭い！

そのたびに、私がしている目隠しは無理やりに外されてしまうんだ。見ない振りをしていたって同じだと。どうせお前もいつかはあの臭いを発しながら消えていくのだと。

恐怖だよ。私が必死で築き上げてきた何かが、あの臭いだけによっていとも簡単に壊されてしまうんだもの。

私からもいつかあんな臭いが発せられる日がやってきてしまうのだろうか。いやだ、嫌だ、ならばそんな臭いを発するその前に、この黒髪に白いものが混じるその前に、終わりにしてしまおうかとも思った。

だから、TVで寝たきりの老人が「まだまだ生きたい」と力なくマイクに向かってささやいているのを見たときは驚愕したし、吐き気もしたよ。こんな無様な姿をさらして、こんなたくさんの人に迷惑をかけて、何よりあの忌まわしい臭いを強く発しているのにもかかわらずそんな言葉を口にできるとは、こいつは年のせいで気でも狂ったんだ。そうおもったよ。

だけどね、自分で終わらせる勇気も私にはとてもなかったんだ。死ぬ勇気案ってとてもないし、でもこのまま死に向かっていくのも怖い。矛盾しているんだよ。全く、笑ってしまうねえ。

そんな時だったよ。あの子に出会ったのは。

第二章 出会い

そんな時だったよ。あの子に出会ったのは。

その日は雨でね。私はいつ学校までは自転車で登校していたんだが、そんなわけで、その日は電車に乗ったんだ。

それが分かれ道だった。

満員電車だった。私は立っていたんだけど、なんと老人たちが私を取り囲んでいてね。臭いが一気に私に襲い掛かってきた。私は軽く涙目になっていた。口だけで息をしているのでひどく息苦しくてね。たまらず近くの手すりに顔をくっつけたんだ。そしてすぐに払いのけた。

臭いが、あの忌まわしい匂いが手すりにまでこびりついていたんだ。そのときになって老人たちが手すりにつかまっていた事を思い出したよ。すぐさま払ったけれど、臭いは消えない。老人たちは得体の知れないものでも見るような眼で私を見てねえ。かまわず、独りがハンカチを差し出してきたんだ。逆効果だよねえ。

私はついに我慢できなくなった。声を上げて、その場から逃げ出したんだ。満員電車の中で、人の足を踏んだり、手を払いのけたりして。必死でねえ。そうしたら、ちょうどドアが開いていてね。涙と人とでよく見えない中必死になって跳ぶようにして降りたんだ。なに？ 今の私と同じような状況だって？ そう見たいだねえ。

ちなみに、その時の私が今の貴方と同じように降り立ったのも、この駅なんだよ。なんだかすごい事だね。

話を戻そうか。電車が行ってしばらくして涙も乾いてきたところで、私はここが知らない駅だということにようやく気付いた。どうしようかと思って前を見たらね。 あの子がいたんだ。

あの子はセーラー服姿で、髪はきちんと結わえられていた。顔はなんと言うか北海道の雪みたいに真っ白でその中の黒い大きな目がね、私をじーっとみていたんだよ。

まるで何年も生きていたような目でね、あたしは見た瞬間から、その目から目を離す事が出来なくなってしまった。

するとね、その子はゆっくりとあたしに向かって微笑んできたんだ。見せたかったなあ。あなたにも。

そして聞いてきたんだよ。

“ねえ、ずっとそのままでいたい？” ってね。

第三章

私は二つ返事で言ってしまったよ。

「そのままでもいい」ってね。

その瞬間、あの子はとても悲しそうな顔で、でも同時に、ひどく残酷な笑みで私を見たんだ。まるで、子供が、奪い去ったおもちゃを見ている時みたいに。そして

「そのうち分かるよ」

あの子はそういつてから、またにこっと私の顔を見つめたまま微笑んだんだ。

私はぞっとして思わず目をそらしてしまった。

ぶわあっと風が起こってしばらくたってようやく顔を起こした時にはもう、あの子はどこにも見えなくなっていた。

しばらくして、私は自分の容姿が全く変わっていないことに気付いた。2, 3年前の写真と寸分変わらず同じ姿でいられる。毎日あっている人は分からなかったみたいだけど、2年ぶりにあった祖母には、大分気味悪がれたよ。

私はうれしかった。

それこそ部屋中を、いや、世界中を飛び回りたくなるくらいうれしかった。ずーっとこのままでいられる。あたしは死なない。死なないんだっ！

しかし10年もたつと、さすがの両親も気味悪がるようになった。

そりゃあそうだ。周りの友達はまだ完全に大人の顔になっているというのに、娘は10年前の写真と少しも変わらない。

その時になってあたしはようやく気付いたんだ。

あたしは死と引き換えに、ものすごく大事なものを失ってしまった。

もうここには居られない、そう思ってすぐさま家を出て、あのホーム、つまりここにやってきたんだよ。

あの子は、10年前と全く変わらない格好と顔でそこに立っていた。あたしを見てあの時見たいな顔でうれしそうに笑っていてね。近づくとこう言ったんだ。

「気がついた？」って。

その瞬間、私はあのこの首を絞めていたよ。

永遠の命といっても、老い以外は関係ないようだ。

あっけなく死んじゃったよ。

それからどうしたって？ それはあなたにも分かるでしょう？

あたしはあのこのあとを継いだ。あたしに少しでも似ている人を見ては片っ端から声をかけていった。

ただ一つ、あの子とは違って、今までのあたしの人生を話してあげるようにしたんだ。優しいだろう？ あたしに出来る事はそれくらいしかないからねえ。

で、あなたはどうか？ リスクが大きいことくらいもう分かっただろう？

それでも老いが怖い？

・・・そうか、あたしはいまや、生きている事のほうが恐ろしいけれど。
少しでも嫌気がさしたら、次の電車でここから立ち去ってしまう事だね。
え？やって欲しいだって？ 本当にいいの？ まあ・・・
それは残念。